ひと

関西学院大に新設される災害復興制度研究所で所長に就く

宮原 浩二郎 さん (48)

05/1/9

「個人の生活再建なくして復興はありえない。現行支援策の不備を洗い出し、5年後には災害復興基本法案を世に問いたい」。阪神大震災から17日で10年。節目の日に新設される研究所の所長として、こんな目標を掲げている。

暮らしの再生や心のケア。さらに万一に備えた災害基金の提案まで。取り組む課題は幅広い。社会学者として自らも研究陣に加わるが、「現実に即した生きた学問を目指す。スマトラ沖大地震の現場からも学びたい」という。

兵庫県西宮市の同大学では23人の学生・教職員が犠牲になった。自身も神戸市のマンションで被災。部屋に皿の破片が散らばった。食べ物や水の確保など、自分を守るだけで精いっぱいだった。家の外では、消防隊員や自衛隊員らが手際よく動いていた。

学生たちにこんな体験を語るとき、自戒を込めて説いている。「社会貢献をするにも実力が必要。腕を磨こう」

東大から大蔵省へ。米国の大学院に派遣されて社会学を修めたが、政策実務より社会のありようを突き詰めたいと学者への転身を決意。30歳で関学大の教員公募に応じた。

被災地には今も二重ローンに苦しむ人や孤独死する高齢者がいる。「外見は復興したが、人に目を凝らせば傷は深い」。研究所のキャッチフレーズは「人の復興」。2月に新潟県中越地震の被災者らを招き、体験を語ってもらう。

文　鎌内 勇樹
写真　浅野 哲司